

# キムジョンイル主義と社会主義

井上 周八

## 目 次

はじめに

- 1 マルクス主義とレーニン主義の定式化
- 2 キムイルソン主義の定式化
- 3 キムジョンイル主義について
- 4 後継者問題の解決
- 5 金正日書記の資質と思想・理論活動について
- 6 金正日書記による科学的社会主義理論の展開

おわりに

## はじめに

昨年7月8日、金日成主席は急逝した。朝鮮人民と世界の進歩的人民は大きな衝撃を受けた。

わたしが金日成主席の指導する共和国とその指導思想であるチュチェ思想の素晴らしさを知ることができるようになった第一歩は、1979年3月から4月にかけての訪朝であった。わたしは、チュチェ思想国際研究所第1回訪朝団の一員として3週間、共和国を訪問した。チュチェ思想国際研究所が創立されたのは1979年であった。

この第一回訪朝団員は6名であり、そのうち5名は50才以上で、ただひとりの青年が参加していた。彼は金日成主席が偉大であることを熱心に初めての訪朝者であるわたしに語りかけてくれた。しかし、わたしは主席がどんなに偉大であってただ一人の人間である、偉大なのは勤労する人民大衆であって、個人崇拜には賛成できないと考えながら平壤空港に到着した。

だが、滞在日数が重なるにつれてやがてわたしは、金日成主席が人民大衆のしあわせの実現のためにすべてを捧げており、それゆえ人民大衆は主席を慈父として敬愛しているのであり、主席と人民大衆は一つに結ばれており、一つであることがわかってきた。

いまにしておもえば、このことを知ることが、朝鮮を理解するさいにおける最も重要な問題だったのである。

領袖、党、大衆が愛と信頼で一つに結ばれ、社会的政治的生命体を形成しているところにこそ、人民大衆中心の、朝鮮式の社会主義が必勝不敗である真の原因がある。

金正日書記は、「わが国の社会主義の永遠の生命力となる領袖、党、大衆の一心団結は、まさに主席が備えた人民に対するこのうえない愛情に源泉があります。主席が人民を限りなく愛し、人民の念願を輝かしく実現したので、人民は主席を父として限りなく尊敬し、高く敬慕して忠誠と孝誠を尽くすのであります」（『人民大衆中心の朝鮮式社会主義は必勝不敗である』1991年5月5日）と述べているが、主席が人民の念願を輝かしく実現しており、それゆえ人民が主席を限りなく敬慕しているという真理を、わたしは初の訪朝で知ることができたのである。

いまから13年まえの1982年4月4日、わたしは日本を出発してインドのニューデリーで金日成主席生誕70周年を祝賀して開かれた「チュチュ思想国際セミナー」の出席し、引き続き平壤を訪問し、主席の生誕70周年の行事に参加した。

4月15日、慶祝パーティが盛大に主席府で開かれ、わたしも参加することができたが、主席はその時の挨拶のおわりの部分で次のように述べた。

「わたしにとってもっとも喜ばしいことは、人民の愛と支持をうけることであり、もっとも生きがいのあることは、人民のために服務することです。わたしの願いは、今後もひきつづき人民の愛と支持の中で生きることであり、わたしの革命的義務は、人民のために最後まで闘うことです。」

まことに感激的な、忘れることのできない瞬間だった。

この年の5月11日、わたしは金日成主席の接見をうけることができた。主席は親しい雰囲気の中かでわたしに語りかけてくれ、わたしも自己紹介をかねてお話ししたのであるが、そのなかで「これからわたしは一学究として朝鮮における後継者問題ならびにチュチュ思想について、それぞれ著書をまとめたいと考えております」と申し上げたところ、主席は「同志の決意に感謝します」とよろこんで下さった。わたしはこの約束にしたがって、1983年に『現代朝鮮と金正日書記』（雄山閣）を、1987年に『チュチュ思想概説』（雄山閣）を出版した。

1990年9月17日、わたしはチュチュ思想国際研究所理事代表団の団長として妙香山で主席とお会した。主席は、この年エクアドルのガヤキルでチュチュ思想国際研究所の理事長に選出されたわたしにお祝いのことばを下さり、いろいろな教訓をわたしたちにして下さったが、ソ連、東欧の社会主義の挫折にふれ、「わが国の社会主義は人民大衆のための社会主義だから、どのような風が吹こうが何らの心配もありません」と語っていた。

そのご、わたしは1992年に制定された「国際キムイルソン賞」の最初の受賞者に選ばれ、1993年9月6日、マンステ議事堂で、朴成哲副主席から勲賞と記念品を授与され、翌7日には、金日成主席の接見をうけ、受賞にたいする祝辞を頂き、食事をともにして主席のお話を聞くことができた。主席はとてもお元気で、今年も豊作ですと喜んでおられた。

昨年4月7日、わたしは日本を出発し、インドのニューデリーでチュチュ思想国際セミナーに参加したのち、10日に平壤に到着し、4月15日の金日成主席生誕82周年の祝賀宴に参加することができた。インドから平壤へと直行したのは12年ぶりであった。

誕生祝賀宴が終了し、主席とテーブルを同じくした出席者を見送ってくれた主席に、わたしはインドの国際セミナーが成功であったこと、ならびにセミナーに参加した各国の代表が主席の万年長寿を熱烈に祈願していたことを報告した。

あの日、主席のとてもお元気な御様子をみることができたわたしには、主席の急逝はまったく信じられないことであった。

主席は逝去された。しかし主席は人類の自主偉業の指導者として、いつまでも世界の進歩的人民とともに生き続けるであろう。

何よりも、世界の進歩的人民にとって心強いことは、主席が心からの信頼をよせていた金正日書記が健在だということである。

金正日書記は、1974年から主席の後継者に選出されていたのであり、金正日書記が主席とともに朝鮮人民の中心に位置して指導してきていたので、この点についてわたしは何も心配することはなかった。主席の急逝についていくつかの新聞社とテレビ局から、これから朝鮮はどうなるのかと取材をうけたが、わたしは「金日成主席生存中の政策、方針の一切は不変であり、金正日書記が、主席のすべての路線と政策を貫徹することは間違いない」と確信をもって答えることができたのである。

朝鮮人民は、「主席は書記であり、書記は主席である」と確信している。

昨年は朝鮮人民の指導者であり、金日成主席の後継者である金正日書記が、金日成主席の革命思想をキムイルソン主義と定式化した20周年にあたる年でもあり、また党活動開始30周年にあたる年でもあった。

金正日書記は、キムイルソン主義とは主席のチュチェ思想、理論および方法の全一体系、すなわちチュチェ思想とそれによって明らかにされた革命と建設にかんする理論と方法の全一体系であると定式化した。

以下、金正日書記が、金日成主席の革命学説をキムイルソン主義として定式化したことについて述べることにするが、そのまえに、まずマルクス主義とレーニン主義の定式化について述べなくてはならない。

## 1. マルクス主義とレーニン主義の定式化

周知のようにマルクスとエンゲルスは、19世紀の中期に、観念論と形而上学を否定して唯物論と弁証法を勝利させ、人間を生産活動を営む社会的存在であり、社会の発展において生産力と生産関係の矛盾が決定的役割を果たすとみる唯物史観（史的唯物論）を『経済学批判』『序言』（1859年）で定式化した。

エンゲルスは『空想から科学への社会主義の発展』（1880年）のなかでつぎのように述べている。

「いっさいの社会的変化や政治的変革の究極の原因は、人間の頭脳のうちに、永遠の真理や正義へとますます増進する洞察のうちに求めるべきではなく、生産および交換様式の変化のうちに求めるべきである。すなわち哲学のうちにではなく、当時代の経済のうちに求めるべきである。」

マルクスは「これまでのすべての社会（原始共同社会を除く）の歴史は階級斗争の歴史である」（『共産党宣言』1848年2月）と述べ、プロレタリア革命による社会主義・共産主義の実現を目指した。

マルクスの思想・理論をマルクス主義として定式化したのは、まずエンゲルスであり、ついでレーニンであった。

エンゲルスは、『反デューリング論』（1877年）においてマルクス主義が哲学、経済学、社会主義の三つを構成要素としている学説であることを解明した。

『反デューリング論』は、『オイゲン・デューリング氏によってなされた科学の変革』という書名の略称であるが、この著書は、デューリング（1833～1921年）の小ブルジョア思想が、当時、ドイツの党内で支持され、喝采を受けていた状況のもとで、ドイツ社会主義労働党の指導部に依頼されて、エンゲルスがデューリングの見解を批判克服するために執筆したものであった。しかしこの著書にはエンゲルス自身が「われわれの見解の百科全書的概観」とであると述べているように、マルクス主義の全面的体系的解説がなされている。

レーニンもマルクス没後30周年を記念した論文『マルクス主義の三つの源泉と三つの構成部分』で、エンゲルスの『反デューリング論』を継承してマルクス主義を解説している。

レーニンは、マルクス主義に依拠して、資本主義の独占段階である帝国主義を研究して『帝国主義論』（1916年）を執筆し、1917年10月のロシアにおける社会主義革命に成功し、歴史上はじめて社会主義社会を地上に実現した。

レーニンの革命理論をレーニン主義と規定したのはスターリンである。スターリンは著書『レーニン主義の基礎』（1924年）で、「レーニン主義は帝国主義とプロレタリア革命時期のマルクス主義である。もっと正確に言えば、レーニン主義は一般的にプロレタリア革命の理論と戦術であり、特殊的にはプロレタリアート独裁の理論と戦術である」と定義した。

マルクスとエンゲルスが創始し、レーニンが発展させたマルクス・レーニン主義は、その後の国際労働者階級の革命斗争の旗じるしとなった。

## 2. キムイルソン主義の定式化

しかし、時代は変化し、時代の変化は新しい、より完成された指導思想を求めた。

マルクスとレーニンが活動していた時代とは異なり、現時代は、かつて抑圧され、さげすまれていた勤労人民大衆が自己の運命の主人として登場した時代であり、自主の時代である。

新しい時代はそれにふさわしい新しい、より正しい思想を要請するが、この要請にこたえて金日成主席のチュチェ思想とそれにもとづく理論、方法の全体系であるキムイルソン主義が朝鮮革命のなかで創始された。

金日成主席の思想、理論、方法が時代の指導的役割を果たすことができたのは、それが新しい自主の時代の要請にこたえる科学的革命的思想・理論であり、激動する現代の革命と建設の実践を通してその真理性が確証され、人民大衆の心をとらえ、支持されたからである。

金正日書記の理論的功績について語る場合、まず第一にあげなければならないのは、金日成主席の革命思想を、主席の名を冠して「キムイルソン主義」として定式化したことである。

主席の革命思想は、人民大衆が歴史の表舞台に主人として登場し、歴史を力づくよく推し進める自主の時代の指導思想として創始された。この主席の革命思想が、先行の革命思想、とくにマルクス・レーニン主義とどのような関係にあるが、その独創性はどこにあるのか、さらにその歴史的意義をどのように明確にするかという問題は、現代が解答を求める切実な思想的・理論的課題であった。書記は、主席の切り開いた革命偉業の継承と完成を自己の使命として早くから考えてきた。書記は今から20年ほどまえに次のように述べている。

「わたしは最近、金日成主席が開拓したチュチェの革命偉業をどうすれば輝かしく継承できるのか、という問題について多くのことを考えています。」

書記は青少年時代から、金日成主席の思想・理論と党の文献の学習に努め、主席の革命的思想・理論は、マルクス・レーニン主義の原理・原則を継承しているが、それに止まらず、人間中心の世界観、すなわちチュチェ思想に立脚する新たな学説であり、先行のすべての革命学説が到達することのできなかった科学的な、独創的な学説であることを深く認識するにいたった。

当初、一部の人びとは、主席の革命学説を「現代のマルクス・レーニン主義」などとよんでいたが、書記は身近な人たちに次のように語っていた。

「主席の偉大な革命思想は、いかなる古典とも比較できないほど幅広く深遠なものです。ところが、私たちの幹部は、この偉大な思想の世界史的地位を明確にはしていません。……」

私は近頃、よくこういうことを考えます。主席の革命思想を主席の名前と結びつけて、金日成主席と呼ぶ時期はすでに到来したと。いや、むしろ遅きに失したという感すらあります。……」

こうした書記は、今から21年まえの1974年2月19日、全党宣伝活動家講習会における『全社会の金日成主義化をめざす党思想教育活動の当面の諸課題について』という歴史的演説を行ない、そのなかでついに金日成主席の革命学説を「キムイルソン主義」として定式化したのである。

書記は、この演説でキムイルソン主義について次のように述べている。

「キムイルソン主義は、チュチェ時代の要求を反映して生まれた新たな、独創的で偉大な革命思想です。キムイルソン主義は、一言でいえばチュチェの思想、理論および方法の体系です。いいかえれば、チュチェ思想とそれにもとづいて明確にされた、革命と建設にかんする理論と

方法の全一的体系です。チュチェ思想を真髄とし、それにもとづいて革命理論と指導方法が全一的に体系化されているということに、キムイルソン主義が従来の労働者階級の革命理論と区別される特徴があります。キムイルソン主義こそはわれわれの時代、チュチェの時代の真の革命の指導思想・指導理論・指導方法です。」

このようにキムイルソン主義の定式化は、金正日書記によってなされたのである。

金日成主席の革命学説が、チュチェの思想・理論、方法の体系であるという定式化のもつ意義は極めて重要であり、この定式化によって、現代の指導思想、指導理論、指導方法としてのキムイルソン主義の体質が明らかになり、チュチェ思想を真髄とするキムイルソン主義の革命性、科学性、独創性が闡明されたのである。

キムイルソン書記は、その構成内容においても新しく、独創的である。マルクス・レーニン主義は、哲学と経済学および社会主義という三つの構成内容からなりたっているが、キムイルソン主義はチュチェ思想と、それにもとづく革命理論（戦略戦術）および自主性実現のための方法をその構成内容としている。キムイルソン主義が、マルクス・レーニン主義と本質的に異なる点は、それが徹底した人間（人民大衆）中心の革命的思想・理論だということである。

キムイルソン主義の創始によって、現代の労働者階級をはじめとする人民大衆は、チュチェ思想を指導思想として、人間、自然、社会を改造し変革する革命偉業を目的意識的に推進できるようになり、進歩的人民はキムイルソン主義こそが、自主性をめざす斗争を勝利へ導く指導思想であることを確信し、民族解放、階級解放、人間解放のためのたたかいを力強く展開することができるようになったのである。

### 3. キムジョンイル主義について

ところで、マルクス主義、レーニン主義、マルクス・レーニン主義ということばはよく知られている。また金日成主席の創始したキムイルソン主義もこんにち世界的に研究され普及しつつある。

ところが1990年代にはいるや金正日書記の思想、理論、方法がチュチェ思想研究者の間から「キムジョンイル主義（金正日主義）」とよればはじめるようになった。

当初、わたしはキムジョンイル主義ということばに接して次のように考えた。

金正日書記は、金日成主席のチュチェ思想とそれにもとづく革命と建設について理論と方法を全面的に継承し、精力的かつ多面的な思想・理論活動によって主席の思想・理論を深化・発展させている現時代の卓越した思想・理論家であり、現代史を力強く前進させている指導者である。

しかし、だからといって金正日書記の思想、理論、方法をキムイルソン主義とならべてキムジョンイル主義とよぶことができるのであろうか。またできるとしたら、その意義は何であろ

うか。

金正日書記の思想、理論、方法は、金日成主席の思想、理論、方法を完全に継承し、それを深化発展させたものであり、したがってキムイルソン主義とキムジョンイル主義はその本質を同じくしている。

ではその本質においてキムイルソン主義と同一のものである書記の思想、理論、方法をキムイルソン主義とならべてキムジョンイル主義とよぶのは正しいのであろうか。また正しいとしたらその理由は何であらうか。

結論的にいえば、書記の思想、理論、方法をキムジョンイル主義とよぶのは、それがキムイルソン主義を完全に継承していると同時に、キムイルソン主義を深化発展させているからであり、したがってキムジョンイル主義とよぶことは正当であり、そのもつ意義は極めて大きい。以下その理由について述べよう。

チュチュエ思想を核心とするキムイルソン主義を正しく理解するなら、チュチュエ思想とキムイルソン主義が創始された以降の時代の指導思想・理論・方法は、チュチュエ思想とキムイルソン主義を継承し、深化発展させた思想・理論・方法以外にはあり得ないことを、当然のこととして認めざるを得ないであらう。なぜなら、キムイルソン主義の核心をなすチュチュエ思想は、世界に対する最も正しい見解、観点と立場、方法の全一体系であり、このチュチュエ思想にもとづく革命の理論と方法であるキムイルソン主義は、最も科学的革命的な思想・理論・方法の体系だからである。したがって、キムイルソン主義が創始されたあとの革命と建設の思想・理論・方法は、かならずチュチュエ思想とそれにもとづく理論と方法でなければならない。

チュチュエ思想とそれにもとづく革命と建設の理論・方法の全一体系であるキムイルソン主義は、人類の到達した最も科学的かつ革命的な学説である。

チュチュエ思想は、世界にたいする見解、観点・立場、方法の全一体系であり、人間（人民大衆）中心の科学的世界観であるが、これにたいしてキムイルソン主義はチュチュエの思想、理論、方法の全一体系である。

書記は、「キムイルソン主義はチュチュエ思想を真髄とす思想理論体系であります。キムイルソン主義の独創性はチュチュエ思想の独創性によって規定されます。したがって、われわれはキムイルソン主義について論ずるとき、まずチュチュエ思想を考えることになるのです」（『キムイルソン主義の独創性を正しく認識するために』1976年10月2日）と述べるとともに、「だからといって、チュチュエ思想とキムイルソン主義を同一視してはなりません。現在、一部の人はチュチュエ思想とキムイルソン主義を同一視していますが、それは内容において同一のものではありません」（同上）と述べている。

しかし、キムイルソン主義はその全体がチュチュエ思想にもとづいて展開されているので、この意味でチュチュエ思想という表題でキムイルソン主義をさし、キムイルソン主義ということばでチュチュエ思想をさすことがある。たとえば書記は、「金日成同志は、朝鮮革命を導く過程で

チュチェ思想にもとづき革命と建設で提訴されるすべての問題に科学的な解答を与え、チュチェの思想、理論、方法を全面的に体系化した。金日成同志によって明らかにこされた思想、理論、方法は、いずれもチュチェの原理から出発しそれを具現したものである。こうした意味から、われわれは金日成同志の思想、理論、方法をチュチェ思想というのである」(『マルクス・レーニン主義とチュチェ思想の旗を高くかかげて進もう』1983年5月3日)と述べている。

なお、チュチェ思想もキムイルソン主義も方法論をその不可欠の構成部分としているが、両者の方法論はいずれも自然と社会と人間自身を改造するための方法論である。

チュチェ思想は、この世界において、人間はあらゆるものの主人となることができ、すべてを決定することができる唯一の社会的存在であることを歴史上はじめて明らかにした。

この世界(自然と社会)の主人は人間であり、人間はあらゆるものを決定す。なぜなら、この世界で自主性、創造性、意識性をもつ社会的存在はひとり人間だけだからである。人間以外のあらゆる生物(生命物質)は、ただ自然の一部分として、自然のゆるす範囲内で、受動的に生存しているにすぎず、高級な動物でも、その行動は本能的なものであるに過ぎない。これにたいして人間は、自然と社会と自己自身を改造変革して、自主的・創造的・意識的に、受動的でなく能動的に生きる。

人間の本質を自主性、創造性、意識性をもつ社会的存在であると規定したのも、歴史上チュチェ思想が初めてである。

人間は、この三大特性をもつが故に、あらゆるものの主人となり、すべてを決定し、世界と自己の運命の主人として生きることができるのである。

人間は世界のなかで生きている。そして人間が自主的、創造的、意識的に世界と自己の運命の主人として生きることができるかどうかは、世界との関係で決まる。このため真の哲学は、世界と人間の問題を問題とする。チュチェ思想は、この世界と人間の問題を「哲学の根本問題」として提訴し、「人間はあらゆるものの主人であり、すべてを決定する」という哲学的原理をその解答としたのである。

金正日書記は『チュチェ思想について』(1982年3月31日)のなかで、次のように述べている。

「世界が物質からなり、物質の運動によって変化発展することはすでに明らかにされています。チュチェ思想は自然と社会を支配する主人はだれであり、それを改造する力はどこにあるかという問題に解答を与えることによって、世界にたいする見解を新たに明らかにしました。世界が人間によって支配され改造されるというのは、人間との関係において明らかにした世界に対する新しい見解であります。」

このようにチュチェ思想は、人間をたんなる世界の一部分としてではなく、世界を支配し改造する主人とみることによって、それまでの一切の哲学とは根本的に異なる世界観、すなわち世界の主人である人間を中心に、世界とその変化発展に対応する観点と立場を明らかにした新しい世界観となったのである。



書記はつぎのように述べている。

「歴史上にはさまざまな類型の世界観がありましたが、人間を中心にして世界にたいする観点と立場を解明したものはありませんでした。世界を観念や精神の世界とみなす観念論者はいうにおよばず、過去において世界を物質の世界とみた唯物論者たちも、人間を中心にして世界にたいする観点と立場を示すことはできませんでした。」(同上)

書記はさらに次のように指摘している。

「歴史の発展にともない世界の主人としての人間の地位と役割はさらに強まり、その自主的、創造的、意識的な斗争によって人間の意思に支配される世界の領域は日まじに拡大されています。現代にいたって人民大衆は世界の真の主人として登場し、その斗争によって世界はますます人民大衆に奉仕する世界にかわりつつあります。」(同上)

人間中心のチュチュ思想を一種の観念論ではないか、と批判する人もいるが、人間中心のチュチュ思想こそはもっとも徹底した唯物論であり、科学的、革命的な世界観である。

金正日書記はこのことをつぎのように述べている。

「一部の人は、チュチュ哲学は人間中心の哲学であるから、唯物弁証法の一般的原理とはなんのかかわりもないかのように考えています。チュチュ哲学は、人間を物質世界から分離して孤立的に考察するのではなく、それより未発達の物質的存在との関係で考察することにより、人間の本質的特性はなんであり、人間の地位と役割はいかなるものであるを解明しています。もっとも発達した物質的存在である人間が、それより未発達の物質的存在にたいし主人の地位をしめ、世界の発展において、もっとも高等な物質の運動である人間の運動が、下等な物質の運動に比べ、より大きな役割を果たすというのが、唯物論と弁証法の基本原理に合致することという事は明白です。チュチュ思想は唯物論と弁証法の原理をすてたのではなく、それを前提にして物質世界における人間の特出した地位と役割を科学的に解明することにより、唯物弁証法をもさらに完成させたということが出来ます。」(『チュチュ思想教育における若干の問題について』1986年7月15日)

書記がここで述べているように、人間中心の世界観であることこそが、もっとも科学的な世界観なのである。なぜなら世界でもっとも発達した物質である人物の運動が、人間以外の物質の運動に比べて、より大きな、決定的な役割を果たすということは、だれもが否定できない科学的真理だからである。

金正日書記は人間中心の世界観の優位性について次のように述べている。

「世界における人間の地位と役割は、物質世界の一般的特徴と人間の本質的特性にたいする哲学的解明にもとづいてのみ明らかにすることができるのですから、人間中心の哲学的世界観は、物質世界の一般的特徴を解明する原理と、人間の本質的特性を解明する原理、そして世界における人間の地位と役割を解明する原理のいずれをも包括していることになります。こういう点で、チュチュの世界観は従来の哲学的世界観にあった一面性を克服し、世界の本质と人間

の運命の問題にもっとも深奥かつ包括的な解明を与えた哲学的世界観であるといえます。」(同上)

またチュチェ思想は科学的な世界観であると同時にもっとも革命的な世界観である。

書記はつぎのように述べている。

「思想の革命性は、それが人間の自主性をいかに断固として擁護し、それを実現する道をいかに科学的に示すかによって決まります。チュチェ思想は、社会的人間の生命である自主性を擁護し実現することを革命の究極の目的とし、それを完全に実現するまで、革命を最後までつづけることを要求する徹底した革命思想です。」(同上)

実にチュチェ思想こそは、自主的に生き発展しようとする人間の社会的本性に即して、自然と社会と人間自身を徹底的に改造して、人民大衆を世界と自己の運命の完全な主人として、人類の永遠の幸せと繁栄の道を示す、もっとも完璧な革命学説であり、完成された共産主義思想であり、人間の尊厳と価値を限りなく高めた科学的・革命的世界観である。

したがって、人民大衆が世界を自主化し理想の社会を建設するためには、人類の到達した最高の世界観であるチュチェ思想とそれにもとづく理論と方法の体系であるキムイルソン主義を必ず継承し発展させなければならないのである。

キムイルソン主義は、マルクス主義やレーニン主義のように、哲学的世界観としてまだ未完成であり、限界のある学説ではなく、人類が思想史上はじめて到達した不滅の哲学的世界観である。それゆえ、キムイルソン主義は、マルクス・レーニン主義のように、より優れた学説に包摂されて、その限界を克服されなければならない過渡的な学説ではない。

キムイルソン主義は、その後の革命家がただ全面的にこれを継承し、革命と建設の過程で深化発展させなければならない学説である。したがって自主偉業を継承する革命家は、キムイルソン主義をもっとも忠実に継承し、深化発展させなければならない。そして周知のように、現在、キムイルソン主義をもっとも忠実に継承し、深化発展させつつある主席の後継者は金正日書記である。

したがって、キムイルソン主義を継承し、新たに深化発展させつつある金正日書記の思想、理論、方法をキムジョンイル主義とよぶことは完全に正当であり、わたしたちはキムジョンイル主義を深く研究し、普及しなければならないのである。

今日、キムジョンイル主義を研究することは、キムイルソン主義の理解をより一層深めるうえでも不可欠の条件である。

#### 4. 後継者問題の解決

金正日書記は、既述のように1974年に後継者として選出された。

金正日書記は、金日成主席の創始したチュチェ思想とキムイルソン主義を完全に継承してい

るが、このことは金日成主席にたいする書記の忠実性の表れであり、後継者としての第一の資格である。

書記は、今から29年まえの論文で次のように述べている。

「敬愛する金日成同志は、朝鮮人民が数千年の悠久な歴史においてはじめて迎え、高く仰いだ偉大な領袖であります。朝鮮人民は金日成同志のような偉大な指導者を仰ぐことにより、日本帝国主義を打ち破って祖国解放の歴史的偉業を達成し、アメリカ帝国主義の武力進攻から祖国の自由と独立を誇らしく守りぬいただけでなく、すべてが破壊され、灰燼に帰した廃虚の上に社会主義祖国をりっぱに建設することができました。かつて国を奪われ、亡国の民の境遇で他国に抑圧されてきた朝鮮人民が英雄的人民として全世界に名をとどろかせ、朝鮮が『社会主義の模範の国』として万邦に光を放っているのは、いつに金日成同志を仰ぎその賢明な指導を受けているためです。金日成同志は朝鮮革命のみでなく、反帝自主、民族独立と社会主義のための世界各国人民の革命運動の発展に大きな貢献をすることによって、冒しがたい国際的権威をもち、世界の進歩的人民から高く尊敬されています。」（『金日成同志の偉大さを南朝鮮人民に広く宣伝するため』1965年4月27日）

書記はまたつぎのように述べている。

「かつて朝鮮人民が、日本帝国主義の植民地奴隷としてあらゆるさげすみと抑圧を受け、民族の魂まで失うはめになったとき、金日成同志は不滅のチュチェ思想を創始し、朝鮮人民に民族自主精神をいだかせ、かれらを聖なる革命斗争へと導きました。金日成同志こそは朝鮮民族を再生させた恩人であり、朝鮮人民にもっとも基い社会的政治的生命を与え、もっとも幸せで誇り高い生をもたらしてくれた慈父であります。金日成同志を忠誠心をもってあおぎいただくのは、朝鮮に生まれたすべての人の当然の道義です。

われわれは実生活を通じて、領袖は人民大衆の要求と利益をもっとも理想的に体現しているため、領袖の思想と意図に即して行動することが、もっとも良心的で道徳的な行動であることを切実に体験しています。したがって、領袖にたいする忠実性は共産主義的道徳の最高表現であるというのです。」（『チュチェの革命観を確立するために』1987年10月10日）

そして金正日書記こそが、まさに領袖にたいする忠実性の最高の体現者であり、忠誠と孝誠のかがみである。

金日成主席は、このような金正日書記を極めて高く評価しており、書記が後継者となって共和国における後継者問題がりっぱに解決されたと述べている。

金日成主席が、後継者金正日書記に絶対的信頼をおいていることは、主席の次のような言葉からも明らかである。

「長期かつ困難な斗争のなかでもたらされたチュチェ思想にもとづく党と人民大衆の統一団結は、わが党の栄ある革命伝統の核心をなしています。今日、わが国の全黨員と勤労者は、党の革命伝説を受けつぎ、金正日同志と党中央委員会のまわりにかたく団結して革命の代をひき

ついでいく強力な主体をなしており、これは、朝鮮革命の最終的勝利の基本的保障であります。わたしはこれを非常に満足に思っており、まさにこれがわたしの80年の生涯の主なる総括だと述べたいところです。」(『人民大衆の役割を高めるのは自主偉業勝利の保障』1992年4月15日)

「金正日同志は、彼が身につけている領導力と風貌、彼が発揮した忠実性と献身性、彼が達成した業績によって、人民の指導者として人民から尊敬を受け慕われており、高い權威を担っています。」(『労働新聞』1993年11月10日)

以上のことばのなかに、金日成主席が後継者としての金正日書記にたいする絶大な信頼をわたしたちはみることができる。

領袖の後継者は、つぎのような条件を備えていなければならない。

第一に、後継者は革命偉業を改革し、推進してきた領袖に限りなく忠実でなければならない。いかにすぐれた資質と指導力があっても、領袖への忠誠心がなければ、領袖の思想・理論を継承し、発展させることはできないからである。

第二に、後継者は領袖の思想・理論を深く体得し発展させることができないからである。

第三に、後継者は領袖が革命偉業の開拓と建設の過程で創始した指導方法を学びとり、それをさらに洗練して現実に適用できなければならない。

第四に、後継者は領袖の革命偉業の継承者、人民の指導者として高邁な徳性を身につけていなければならない。人民大衆を信じ、人民大衆を心から愛し、人民大衆のためにすべてを捧げる人物でなければならない。

第五に、後継者は革命と建設において、人民大衆のだれもが認める業績を積み重ねた人物でなければならない。

まさに金正日書記こそは、これらの条件を完備した人民の指導者である。

金正日書記の出現によって、朝鮮における金日成主席の後継者問題は、理論的にも実践的にも輝かしく、成功裏に解決されたのである。

朝鮮における後継者問題と指導の継承問題のこのような輝かしい解決は、朝鮮人民の最大の幸せであるばかりでなく、世界の進歩的人民にとっても心強いことである。世界の各地で行なわれているチュチェ思想の国際セミナーの各国からの参加者一同が必ず主席と書記に手紙を送り、主席と書記の万年長寿を熱烈に念願しているのは、金日成主席と金正日書記にたいする敬慕のあらわれであり、主席と書記の健在であることが進歩的人民の励ましとなっていることの自覚のあらわれだったのである。

## 5. 金正日書記の資質と思想・理論活動について

金正日書記は、朝鮮における社会主義建設の各分野で達成した業績とその人民的活動作風によって早くも1960年代の末頃から「親愛なる指導者同志」とよばれていた。

金正日書記は、1942年2月16日、革命の聖地白頭山で金日成主席と金正淑女子の長男として誕生した。

1950年9月～1960年8月にかけて普通教育過程を終了し、1960年9月から1964年3月にかけてキムイルソン総合大学で学んだ。

高等学校や大学在学中に、すでにいくつかの優れた論文を発表している。

わずか10才になったばかりの幼少の金正日がどのような人間であったかを示す極めて貴重な資料が残されている。

金正日書記は、1952年11月20日、疎開していた万景台革命遺児学院の人民班4学年に編入した。

書記がこの万景台革命遺児学院に通っていたとき、書記のクラスを受け持っていた女教師が転任に際して後任の教師に、書記の教育で必ず参考にすべき事項として12の項目をあげているが、そのうちの若干の項目を紹介すれば、次の通りである。

「① 教員は金日成將軍の著作、とくに最近の著作、最高司令部の報道、国の内外の情勢を適時に、しかも詳細に研究をすること。

金正日の第一の関心事はこれであり、したがってそれらの問題についてつねに質問を受ける。金正日はそれらの問題についてかなり知っているため、教員は、読まず、聞かず、研究せずして応答することは厳に慎むこと。

(2) 金正日は約束を守らないことをもっとも嫌う。したがって約束をおろそかにし、守らなければ、教師としての権威を失ないかねない。

(3) 金正日は時間を非常に惜しむ。時間の浪費がないよう日課を手ぬかりなく組み、それを間違いなく守るように指導すること。気質はよどみない流れのごとく、ためらいを知らず、ただ前進の志向を有するのみである。

(4) 金正日は何事においても、きちんと締めくくりをつける性格である。いったん始めたことは、どんなことがあっても途中で投げだすことがない。教員の助けを借りず必ず最後までなしとげにはおかない。

(5) 金正日は探究心に富んでいる。教員の提示する問題は最後まで掘り下げて解明し、またそれに満足することなく問題の幅を広げて考察する。したがって教員は、提示した問題の正確な解答を用意するだけでなく、その解答（または結論）にいたるまでの詳しい前後関係にも通じていなくてはならない。

(10) 金正日は身だしなみが端正で礼儀作法を人一倍重んずる。このすぐれた品性を助長するよう深く関心を払い、すべての生徒がその模範に見習うように感化させること。」（崔仁秀著『人民の指導者金正日書記Ⅰ』雄山閣1983年3月31日、96～7ページ）

この申し送り事項には、金正日少年のすぐれた資質と品性の一端をうかがわせる貴重な内容が集約されている。

書記のエネルギッシュな思想・理論活動は、1950年代下半期から開始された。

書記は高級中学校時代に、すでに水準の高い論文を発表して教師と学友を驚かせている。この時代の論文としては、『朝鮮革命と青年の理想について』、『青少年の間で共産主義教育を強化するために』などがある。

書記は青少年がブルジョア思想や事大主義・教条主義思想で染まるのを防ぎ、金日成主席の革命思想で武装することを強調した。書記は校内の民主青年同盟組織の責任者として、学校の民青総会をはじめ各会議で報告し、結語などを述べたが、それらは今日でも青少年学生の意識化に大きな意義をもっている。

金正日書記の思想・理論活動は、1960年代前半期（金日成総合大学在学中）にいつそう活発にくりひろげられた。

当時、共和国では社会主義の建設が新たな発展段階にはいった時期であり、国際的には、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの多くの国が独立ないし新生の道を歩んでいた時期であり、他方、帝国主義者の侵略と共産主義運動内部の日和見主義者の策動が激化していた時期であった。

1960年9月1日、書記は金日成総合大学に入学した。在学中の論文としては『大学生のあいだで革命的世界観を確立するために』『金日成同志の革命思想にもとづく党員の思想的・意志的統一と団結を強化しよう』、『現代帝国主義の特徴と侵略的本性について』、『地方経済を発展させるわが党の方針の正しさ』、『大安の事業体系は独創的な社会主義経済管理体系』『社会主義建設における郡の位置と役割について』および『三国統一問題の再検討』などがある。

書記の思想・理論活動は、大学卒業後から1970年代前半の約10年間にいつそう幅広くおこなわれた。

書記は1966～69年にかけて、マルクス、エンゲルス、レーニンの重要な古典を一冊一冊とりあげ、全面的に検討して、社会科学の分野における事大主義、教条主義の克服につとめた。書記は1964年4月から朝鮮労働党中央委員会に所属し、指導員、課長、副部長、部長を歴任し、党を組織的・思想的に強化し、社会主義建設を推進するため精力的に活動を行なった。

当時は、共和国では社会主義工業化が推進、完成され、革命と建設の成果にもとづいて完全に勝利した社会主義の実現が目標となった時期であると同時に、朝鮮の自主的平和統一運動で新たな変化がおり、また、国際的には帝国主義者の戦争政策に抵抗する運動が激しくくりひろげられていた歴史的激動期であった。

こうした時期に、書記はなによりも革命と建設における領袖の唯一的指導思想と指導体系を確立する活動に主力を注ぎながら、思想・理論活動をおこなった。

書記は、マルクス・レーニン主義を主体的観点にもとづいて検討したばかりでなく、古代から現代にいたる哲学をはじめ、経済学、歴史学、政治学、法学、文芸学、教育学、言語学、軍事学、党・国家建設理論など社会科学の全分野、ならびに数学、物理学、電子工学、化学、な

ど現代自然科学・技術の最新の成果をも身につけ、これらの知識を思想・理論活動の素材として情熱的な思想・理論活動を展開してきた。

このほか、書記は、政治、経済、文学・芸術をはじめとするあらゆる分野で提起される問題にたいして、理論的・実践的解明を与え、また祖国統一と国際共産主義運動、世界革命にかんする問題についての多くの論文を発表している。

書記は1973年9月に朝鮮労働党中央委員会の書記に、1974年2月に朝鮮労働党中央委員会政治委員会の委員に選任され、金日成主席の後継者となった。

書記は、主席によって切り拓かれたチュチュの革命偉業を完成するため、朝鮮労働党の栄えある革命伝統の継承発展に大きな力をそそぎ、三大革命を遂行するため、主席が発起した三大革命グループ運動を革命と建設のあらゆる部分に拡大し、その指導体系を整然と確立して、三大革命の遂行を大衆自身の活動とするために、人民経済各部門で三大革命赤旗獲得運動を力強く展開する措置を講じた。また人民経済発展六か年計画と第二次七か年計画、第三次七か年計画の遂行へと全党、全人民を奮起させ、社会主義の物質的技術的土台を強固にきずくうえで大きく貢献した。さらに常国主義者の新たな戦争排発策動に対処して国防力を鉄壁のごとくうちかためた。

1980年10月、書記は朝鮮労働党第6回大会で党中央委員会政治局常務委員会委員・党中央委員会書記・党中央軍事委員会委員にに選挙され、1982年2月から朝鮮民主主義人民共和国第七期、第八期、第九期最高人民会議代議員に、また1990年5月に国防委員会第一副委員長に、1991年12月に朝鮮人民郡最高司令官に選挙され、1992年4月に共和国元師称号を授与されている。

金正日書記は、第6回大会後、全社会のチュチュ思想化に決定的転換をたらす事業を積極的に推進した。

金日成主席が逝去されたこんにち、朝鮮人民にとって何よりも心強いことは、金正日書記がいるということである。

金正日書記は、「主席は天が崩れてもぬけ出る道はあるとの鋼鉄の意志をもって難関を克服し、非凡な指導力で革命と建設を耐え間ない高揚へと導いてきました」と述べているが、金正日書記自身もまたそのような鋼鉄の意志をもつ指導者であり、主席の完璧な後継者である。金日成主席が述べているように「主席は書記であり、書記は主席である」というのが朝鮮人民の確信である。

書記の30余年間の輝かしい思想・理論活動は、キムイルソン主義を深化発展させたものであり、今日ではキムジョンイル主義とよばれて高く評価されており、書記が思想・理論の偉大な英才であることを実証している。

金正日書記の思想・理論活動の特徴は、なによりも金日成主席の革命思想を忠実に継承し、発展する現実の要請に即して、さらに豊かに発展させていることである。

書記は、チュチュの文学・芸術論、キムイルソン主義の定式化とチュチュ思想の体系化、マ

ルクス・レーニン主義の革命的原理・原則の評価とその限界の指摘、人びとをチュチュ型の人間に改造するうえで提起される諸問題、チュチュの革命理論、歴史の自主的主体と社会的政治的生命体についての考察、革命党建設の諸問題、現代帝国主義の分析、ソ連・東欧の社会主義の崩壊の原因の解明ならびに社会主義の再生に関する諸問題などについて優れた業績をつみ重ねているが、わたしは、神幅の都合上、本稿では、ソ連、東欧の社会主義崩壊という重大問題の発生にあたり、金正日書記が発表した社会主義に関する見解をとりあげ考察することとした。

## 6. 金正日書記による科学的社會主義理論の展開

金正日書記は、ソ連、東欧の社会主義諸国が崩壊し、資本主義へ復帰するという事態が連行し、帝国主義者とその代弁者が「資本主義の勝利と社会主義の終末」を喧伝しつつあるなかで、①『人民大衆中心の朝鮮式の社会主義は必勝不敗である』(91年5月5日)、②『社会主義建設の歴史的教訓とわが党の総路線』(92年1月3日)、③『革命的党建設の根本問題について』(92年10月10日)、④『社会主義への誹謗は許されない』(93年3月1日)を逐次発表し、昨年11月1日には、⑤『社会主義は科学である』を主席の逝去後の最初の論文として1年8カ月ぶりに発表した。

これらの論文は、ソ連、東欧で社会主義諸国が相次で崩壊したことは、科学としての社会主義それ自体が崩壊したことを決して意味せず、社会主義はその科学性、真理性によって、崩壊した一部社会主義諸国でも、やがて必ず再生し、終局的には全世界的に勝利することを明らかにしている。

社会主義は勝利するという書記の確信は、朝鮮における社会主義建設の実績にもとづくものであり、世界の進歩的人民の社会主義への確信と希望を一段と強化するものであった。

ソ連、東欧の社会主義の崩壊は、たしかに世界的衝撃を惹起した。帝国主義者と反動派は、ここぞとばかり一斉に、社会主義は自由と人権無視の体制であると誹謗し、執拗に反社会主義宣伝を流布し、また社会主義への背信者たちは、社会主義の理念自体が誤っていたとして資本主義に幻想をいだき、自己の醜惡な社会主義に対する背信行為を弁護した。

しかし、資本主義社会は、書記が教えているように、資本家階級を社会の主人とする制度であり、個人主義をごく少数の資本家の限りない欲望に転換させ、勤労人民大衆を搾取し、自主性を抑圧し、失業や貧富の格差を拡大するなど、人間の本性に反する反動的な、非人間的な社会である。

これに対して社会主義社会は、人民大衆を社会の主人とする、集団主義にもとづく社会であり、人間の自主的本性に合致する最も先進的な社会である。したがって人類が社会主義・共産主義へと進むのは、自主性の実現へ向って発展してきた歴史の必然である。

ではなぜ一部の社会主義諸国は崩壊したのであろうか。



ソ連、東欧の社会主義諸国の崩壊は、それら諸国の社会主義が変質した結果であり、社会主義の根本原則が放棄されたからである。

一部社会主義諸国における社会主義の変質とその結果発生したそれら諸国の崩壊の根本原因を明らかにし、そこから教訓を得て、社会主義建設で固守しなければならない根本原則を明確にすることは、社会主義の道を現在あゆみつつある諸国の人民大衆が、自国の社会主義を固守し前進させるために極めて重要な意義をもつばかりでなく、社会主義をめざしている諸国の人民大衆にとっても重要な意義をもつ問題であり、究極的には全世界の自主化をめざす人類の運命にかかわる極めて重要な問題である。

金日成主席が創始したチュチェ思想を絶えず深化・発展させている金正日書記は、人類のまえに提起された一部社会主義諸国の崩壊という問題に直面するや、この問題をチュチェ思想にもとづいて科学的に分析し、解答を与えた。

書記は、さきの五つの論文で、金日成主席が創始したチュチェ思想にもとづいて明らかにした人民大衆中心の社会主義理論こそが科学的社会主義理論であること、朝鮮における社会主義建設の歴史的成果は、理論的にも実践的にも、チュチェ思想を具現した人民大衆中心の社会主義こそが最も科学的な、威力ある社会主義であることを明白に実証していることを明らかにし、社会主義社会は、人民大衆が社会の真の主人となっている社会であり、集団主義にもとづく社会であり、それゆえ、社会主義は人民大衆を中心として理解しなければならないという主体的観点と、社会主義は人民大衆が社会の主人としての高い自覚と能力をもって建設しなければならないという主体的立場にたつて、主体を強化し、その役割をたえず高めて建設しなければならないことを明らかにし、「社会主義を守れば勝利であり、捨てれば死である」ことを肝に銘じて反社会主義策動を粉碎し、人民大衆中心のあらゆるものが人民大衆に奉仕する社会主義社会を建設しなければならないことを明らかにしたのである。

自主の時代は新たな世界観と指導思想の出現を求める。そしてこの歴史的課題は、金日成主席によって解決された。

主席は新たな世界観であるチュチェ思想を創始し、これにもとづいて革命と建設の理論と方法を明らかにしてキムイルソン主義を創始した。またマルクス・レーニン主義の社会主義理論の歴史的制約性を克服して、チュチェ思想を具現した人民大衆中心の科学的社会主義理論を確立した。

金日成主席は次のように述べている。

「社会主義を成功裏に建設するためには、かならず正しい指導思想がなければなりません。社会的歴史的運動において、指導思想は羅針盤のような役割を果たします。社会主義共産主義建設は人類の理想を実現するためのもっとも聖なる偉業であり、前人未到の道を新たにきりひらいていかなければならない困難なたたかいです。社会主義社会を建設する国ごとに相異なる特性があり、また実情がそれぞれ違っています。こうした状況のもとで、自己の正しい指導思

想がなく、既存の公式や他の国の方式を機械的に模倣しては、社会主義を成功裏に建設することができません。今日社会主義建設の過程で混乱と挫折に直面している一部の国の教訓がこのことを実証しています。

朝鮮人民は自己の指導思想であるチュチェ思想を具現し、この地に自主、自律、自衛の強固な基礎をふまえてたえまなく発展する朝鮮式の世界主義をりっぱに建設しました。」(『ネパール記者協会委員長の質問にたいする回答』1990年11月29日)

金正日書記は、マルクス・レーニン主義の創始者たちが活躍していた時期にくらべ、革命の主体である人民大衆の自主性、創造性、意識性がいちじるしく高まり、人民大衆の地位と役割が大きく変化したこんにち、新たな歴史的環境に即して革命理論と方法を創造的に発展させることが重要な問題として提起されるが、この歴史的課題はチュチェ思想の創始によって解決されたことを次のように述べている。

「時代の発展は世界観の発展をともないます。労働者階級の進出とあいまって開始された革命のたえまない拡大発展は、それまで歴史の対象とされてきた勤労人民大衆が歴史の主人として登場する新しい時代の誕生をもたらしました。労働者階級をはじめ勤労人民大衆が世界を支配する偉大な勢力として登場した新しい時代は、かれらが自らの運命の主人となってそれを自主的に、創造的に切り開き、民族解放、階級解放、人間解放の歴史的偉業を勝利のうちに実現していける新たな世界観の出現を求めました。この歴史的な課題はチュチェ思想の創始によってりっぱに解決されました。」(『チュチェ思想について』1982年3月31日)

チュチェ思想を理解するためには、この思想が、世界の支配者、改造者としての人間を中心とした世界観であることを正しく把握しなくてはならない。

世界の支配者、改造者としての人間の地位と役割を歴史上はじめて解明したのはチュチェ思想である。

金日成主席は次のように述べている。

「チュチェ思想は、あらゆるものを人間を中心に考え、人間のために奉仕させる人間中心の世界観であり、勤労人民大衆の自主性を実現するための革命学説であります。」(『朝鮮労働党第六回大会でおこなった中央委員会での活動報告』1980年10月10日)

金正日書記はチュチェ思想が人間中心の新しい見解であることを次のように述べている。

「チュチェ哲学の理解において、人間を本位にして明らかにした世界にたいする新たな見解についても正しい認識をもつべきです。

チュチェ哲学は人間を本位にして世界にたいする見解を確立し、人間を中心にして世界に対応する観点と立場を解明しました。現代の革命的な世界観としてのチュチェ思想の重要な特徴はここにあります。」(『チュチェ哲学の理解で提起される若干の問題について』1974年4月2日)

このようにチュチェ思想の根本的特徴は、人間中心の世界観だということにある。

書記は次のように述べている。

「世界が物質からなり、物質の運動によって変化発展することはすでに明らかにされました。チュチェ思想は自然と社会を支配する主人は誰であり、それを改装する力はどこにあるかという問題に解答を与えることによって、世界にたいする見解を明らかにしました。世界が人間によって支配され改造されるというのは、人間との関係において明らかにした世界にたいする新しい見解であります。」(『チュチェ思想について』)

歴史上さまざまな類型の世界観、哲学があったが、書記の指摘しているように、人間を中心にして世界に対する観点と立場を解明したものはなく、世界を観念や精神から説明する観念論者はいうに及ばず、世界を物質の世界とみる唯物論者たちも、人間を中心にして世界にたいする観点と立場を示すことはできなかったのである。

これに対してチュチェ思想は、人間を単なる世界の一部分とみるのではなく、世界を支配し改造する主人とみることにより、それまでの世界観とは異なり、世界の主人、したがってまた自己の運命の主人である人間を中心にして世界とその変化発展に対応する新しい世界観を確立したのである。

チュチェ思想が、先行の世界観の一面性を克服した人間中心の哲学的世界観であることは、金正日書記の次のことばが明らかにしている。

「世界における人間の地位と役割は、物質世界の一般的特徴と人間の本質的特性にたいする哲学的解明にもとづいてのみ明らかにすることができるのであるから、人間中心の哲学的世界観は、物質世界の一般的特徴を解明する原理と、人間の本質的特性を解明する原理、そして世界における人間の地位と役割を解明する原理のいずれをも包括していることになります。こういう点で、チュチェの世界観は従来の哲学的世界観にあった一面性を克服し、世界の本質と人間の運命の問題にもっとも深奥かつ包括的な解明を与えた哲学的世界観であるといえます。」(『チュチェ思想教育における若干の問題について』1986年7月25日)

そして人間中心の社会主義は、チュチェ思想を実現した社会主義であり、このことによってマルクス・レーニン主義の社会主義の一面性を克服しているのである。

チュチェ思想を具現した社会主義・共産主義建設の理論は、金日成主席によって新たに創始された。

金正日書記は次のように述べている。

「金日成主席が解明した新しい革命理論、とくに社会主義・共産主義建設にかんする理論を、マルクス・レーニン主義の理論にその根源を求めて解釈しようとしてはなりません。

社会主義・共産主義建設にかんする問題は、金日成主義によって新たに解明されたのです。もちろん、マルクス・レーニン主義の創始者たちも、社会主義・共産主義社会にかんする一連の見解を提示しましたが、それは予測と仮定の枠を大きく超えるものではありませんでした。金日成同志はすでに久しい以前に、マルクス・レーニン主義の創始者たちが提示した命題の中から参酌すべきものはすべて参酌し、社会主義制度の確立後には、わが党が独自に思考してす

べての問題を解決してきた、と述べています。実際において、社会主義制度確立後の革命と建設の理論的・実践的問題は、全的に金日成同志の独創的な思想・理論活動によって解明されました。したがって、こうした問題をマルクス・レーニン主義の古典にその根拠を求めることは不可能であります。」(『金日成主義の独創性を正しく認識するために』1976年10月2日)

金日成主席は次のように述べている。

「周知のように、マルクスは前独占資本主義の時代に生きていたのであり、したがって、当時の社会関係を分析した基礎のうえで偉大なマルクス主義をうちだし、資本主義社会の弔鐘をうちなしました。しかしマルクスは、社会主義革命と社会主義建設を実践的には指導することができませんでした。レーニンは、資本主義列強の政治的、経済的不均等発展の法則が支配する帝国主義時代のマルクス主義であるレーニン主義をうちだし、ロシアの労働者階級を組織し動員して10月社会主義革命を遂行しました。これは人類の歴史発展のうえに新しい紀元をきりひらきました。しかしレーニンも、社会主義建設はおこなうことができず、10月革命が勝利した後まもなく、惜しくも、あまりにも早くこの世を去りました。スターリンは、レーニンの偉業をうけついでソ連における農業の集団化もおこない、社会主義工業化もおしすすめました。しかし、スターリンも社会主義の完全な勝利を見ることができず、まして共産主義の建設には手をつけて見ることもできずに世を去りました。

したがって、わが国で社会主義革命が勝利したのちの時期における、革命と建設に関する理論的、実践的問題は、主として自分の頭で考えだし、これを創造的に解決していかなければなりませんでした。」(『今日のわが革命の要求にそうよう、社会科学の役割をいっそう高めるために』1963年12月30日)

主席はまた次のように述べている。

「もちろんわれわれは、マルクスやレーニンなどの革命の先輩から革命斗争の理論や方法を学びました。しかし、かれらの示した革命理論や方法をいつまでも教条的に適用することはできません。歳月の流れとともに、時代の性格や社会的環境、革命の対象は変わります。革命の対策が変われば、革命の性格も変わり、革命の理論や方法も変わるべきであります。」(『自主性を堅持しよう』1981年9月7日)

朝鮮における人民大衆中心の社会主義は、チュチェ思想を実現した社会主義であり、主体で人民大衆を強化し、その役割を高めて、集団主義にもとづいて建設する社会主義である。

書記は次のように述べている。

「わが国の社会主義は偉大なチュチェ思想を実現している人民大衆中心の朝鮮式社会主義であります。

偉大な金日成主席は早くから人民大衆の志向と時代の要求を反映してチュチェ思想を創始することによって、われわれの時代、自主時代の新たな指導思想を創始しました。チュチェ思想は人間中心の世界観であります。

チュチェ思想は自主性、創造性、意識性を持った社会的存在としての人間の本質的特性を解明したのに基づき、人間があらゆるものの主人であり、すべてを決定するという哲学原理を新たに解明し、人間の利益から出発してすべてのものに対し、人間の活動を基本にしてすべての変化発展に対する主体的な観点と立場を確立しました。

チュチェ思想によって人間の尊厳と価値は最上の境地に達するようになりました。

わが国の社会主義はチュチェ思想を実現していることにより、人間があらゆるものの主人となり、あらゆるものが人間のために仕える人間中心の社会主義となっています。」(『人民大衆中心の朝鮮式社会主義は必勝不敗である』)

金正日書記は、論文『社会主義は科学である』において、「実践経験は、チュチェ思想を具現した朝鮮の社会主義が、もっとも科学的で生活力のある社会主義であることをはっきりと示している」と述べ、「人間にたいする主体的観点と立場」ならびに「人民大衆にたいする主体的観点と立場」から朝鮮の社会主義の科学性、真理性、その生活力を深く解明した。

金正日書記はまず、「人間にたいする観点と立場に関する問題」をとりあげ、この問題は「社会発展、革命発展にどのような観点と立場でたいし、どのように理解するかという点での基礎的問題である。人間にたいする観点と立場は思想と理論、路線と政策の科学性と正当性を規定する基準となる」と述べ、「人間にたいするもっとも正確な立体的観点と立場にもとづいていること、ここにまさに朝鮮の社会主義の科学性、真理性がある」と述べている。

人間にたいする主体的観点と立場は、人間の本質についての科学的解明にもとづいてのみ確立される。人間の本質についての科学的解明はチュチェ思想によってはじめてなされた。

金正日書記は次のように述べている。

「人間の本質をどのように見るかということは、単純な学術上の問題ではなく、階級的利害関係を反映した社会政治的問題である。歴史的に人間の本質問題について、進歩と反動の間に深刻な哲学的論争がくり広げられてきた。反動的支配階級とその代弁者たちは、人間の本質を搾取階級の利害に合わせて歪曲し、搾取社会を合理化するのに利用した。」(『社会主義は科学である』)

書記は続いて、人間を精神的な存在、生物学的存在とみる見解、およびマルクス主義の人間観をとりあげ次のように検討している。

まず、人間を精神的な存在とみなす宗教的、観念論の見解について、これらの見解に従えば「人間は何らかの超自然的で神秘的な存在の産物であり、人間の運命もそれによって決定される」ということになり、「勤労人民大衆が搾取され圧迫を受ける不幸な立場を避けることのできない宿命的なものであり、したがって与えられた運命に服従しなければならない」とことになると述べ、次で人間を単純な自然的、生物学的存在と見る見解について、この見解は「意識の調節、統制の下に目的常識的に活動する人間と、本能によって支配される生物学的存在との質的な差を区別できなくする」ものであり、「弱肉強食の法則が支配する資本主義社会を弁護す

るのに利用される」見解であることを指摘し、「人間は純粋に精神的存在でも、単純な生物学的存在でもない。人間は社会的関係を結びながら生き、活動する社会的存在である。社会的存在であるところに、他の生物学的存在と区別される人間の重要な特性がある」ことを指摘する。そしてマルクス主義が人間の本質を社会関係の総体と規定したことは「人間を純粋な精神的存在と見たり、単純な生物学的存在と見る非科学的、反動的見解を打破するうえで歴史的な貢献となった」と述べるとともに「しかし、人間の本質を社会関係の総体と規定したことは、人間自体が持つ本質的特性に関する全面的解明にはならず、したがって、それだけでは人間と世界との関係、世界で占める人間の地位と役割を解明することはできない」とその限界を明らかにし、「チュチェ思想は初めて、人間自体の持つ本質的特性を科学的に解明し、それにもとづいて人間が世界で占める地位と役割を新たに明らかにした」と述べている。

書記は「過去にも人間自体の持つ特性を基本にして、人間の本質を解明しようとする試みは少なくなかった。人間を話す存在、労働する存在、思性する存在というふうに規定しようとしたことを、事例としてあげることができる。しかしこれらはすべて、人間の本質的属性の発現となるその活動の一定の側面をもって論じたものであった」と指摘し、自主性、創造性、意識性を人間の本質的特性として歴史上はじめて解明したのはチュチェ思想であると述べている。

自主性は、自主的に生き、発展しようとする人間だけがもっている性質であり、創造性は、自然と社会と自分自身を改造する人間の性質であり、意識性は、自主性と創造性を裏付け、保障し、世界を把握し改造するすべての活動を規制する人間の性質である。

世界（自然と社会と人間）を目的意識的に改造変革して、自主的、創造的、意識的に生きようとする社会的存在は人間だけである。

「人間は自主的、創造的、意識的な存在であることによって、もっとも高貴で有力な存在となる。人間は、世界の唯一の主人であり、唯一の改造者である。世界には人間よりも高貴な存在はなく、人間よりも力ある存在もあい。」(同上)

このような人間に依拠した、人間本位の社会主義であってこそ、科学的な社会主義といえることができるのである。「人間本位の社会主義は人間にたいする主体的観点と立場から出発し、すべての問題を人間の創造的役割を高め、解決していく」(同上)のである。

書記は、自国の人民の力を信じることはできないのは、人間の力を信じることはできないブルジョアの人間観と深く関係していると次のように述べている。

「ブルジョア反動たちは、人間をもっとも高貴な存在として見るのではなく、物質的生産のための一つ的手段として、商品として売買される労働力を所有した、とるに足りない存在と見ている。彼らはまた、人間を自らの力で運命を開拓する有力な存在としてではなく、黄金に支配される無気力な存在と見ている。社会主義の背信者たちが資本主義を復活させ、失業と貧窮を競争意欲と労働の強度を高めるための圧力手段と見て、社会主義が築いたすべての人民的施策をなくしてしまうのも、自国民の力を信じず西側資本主義諸国の『援助』と『協力』に期待

をかけて、帝国主義者にへつらい屈従しているのも、人間にたいする反動的なブルジョアの観点と関連している。」(同上)

人間本位の社会主義は、人間にたいする主体的観点と立場に依拠して理解され、建設されなければならない、したがって人間本位の社会主義は、人間中心のチュチュの社会歴史原理にもとづいて建設される社会主義である。

また、人間本位の社会主義は、人間の真の生命である自主性を実現し、人間の社会的政治的命を輝かせる社会主義である。もしそうでなかったら、そのような社会を人間本位の科学的社会主義社会ということはできない。

書記は次のように述べている。

「われわれの社会主義は人間をもっとも大切にし、人間の本性的要求を立派に具現することによって、すべての人びとがいつまでも社会政治的命を保ち輝かせることを可能ならしめ、彼らの肉体的命の要求を円満に保障する真の人間中心の社会主義である。人間本位の社会主義は、すべての社会の構成員が高い思想意識と創造的能力を持って社会と集団のために献身的にたたかいながら、社会と集団の愛と信頼の中で誰もがともに幸せに暮らし、価値と生きがい満ちた生活を心ゆくまで享受できるようにするのである。」(同上)

自主性、創造性、意識性をもつ社会的存在としての人間は、自由的要求と創造的活動の共通性によって社会的集団を構成し、人民大衆として歴史の主体をなしている。

書記は、『社会主義は科学である』において人間にたいする主体的観点と立場から朝鮮の社会主義を考察したのち、次で人民大衆にたいする主体的観点と立場から朝鮮の社会主義が人民大衆の絶対的な支持と信頼を得ているもっとも優れた社会主義であることを考察している。

人民大衆とは、勤労する人びとを基本とする自主的要求と創造的活動の共通性によって結合した社会的集団である。

階級社会では、被搾取・被支配階級が人民大衆の基本を構成している。しかし、人民大衆の階級的構成は歴史的に変化し、資本主義社会では、労働者、農民だけでなく、勤労するインテリをはじめ、自主性を擁護してたたかうあらゆる階級と階層が人民大衆を構成する。

さらに、人民大衆は純粹に階級的な概念ではなく、愛国、愛民、愛族の思想をもって社会の自主化に貢献すれば、誰もが人民大衆の一員となることができるのである。

書記は、人民大衆が社会のあらゆるものの主人であり、全知全能の存在であることを次のように述べている。

「人民大衆は、社会のあらゆるものの主人である。人民大衆が社会のあらゆるものの主人となるのは、社会のあらゆるものが人民大衆によって創造されるからである。

人民大衆は自然と社会を改造するもっとも有力な創造的能力の所有者である。個別の人間の力と知恵には限界があるが、人民大衆の力と知恵には限界はない。この世に全知全能の存在があるとすれば、それは他ならぬ人民大衆である。人民大衆の無限の力と知恵によって社会のす

べてのものが創造され、歴史が前進し革命が推め進められる。」(同上)

人民大衆は物質的富を作り出し、思想文化的財産を創造し、さらに先進的な思想家、優秀な科学者、才能ある文学芸術家を生み出す。社会のすべてのものが人民大衆によって創造されるので当然人民大衆は社会のすべてのものの主人とならねばならず、国家主権と生産手段が人民のものとなる社会主義社会では、人民大衆は政治、経済、文化、軍事などの社会生活のあらゆる分野で主人としての地位を占め、主人としての役割を果たし、主人としての権利を行使しなければならない。

金正日書記は次のように述べている。

「人民大衆は、あらゆるものの教師である。人民大衆の自主的な意思と要求を集大成して体系化すれば、それは思想となり、路線と政策となるのである。労働者階級の党は、つねに路線と政策を打ち出す際には人民大衆の中に入り、彼らの意思と要求に耳を傾けなくてはならない。活動家たちが活動をおこなう際にも、人民大衆の意思と要求に耳を傾けることを最初の工程としなくてはならない。朝鮮労働党が複雑で困難な環境の中でも、もっとも優れた社会主義制度を打ち立て、それを絶え間なく輝かせてこれたのは、人民大衆の中に入り、彼らの自主的要求を反映させて路線と政策を打ち出し、人民大衆の力に依拠して、それを徹底的に貫徹してきたからである。朝鮮の社会主義がいささかの偏向や曲折もなく、もっとも科学的な道を勝利のうちに前進してこれた秘訣がここにある。」(同上)。

社会主義制度が樹立されれば、階級的対立が清算され、人びとの間の関係は対立と不信の関係から愛と信頼の関係へと転換される。

書記は「愛と信頼、これは人民大衆が政治の対象から政治の主人となった社会主義社会において政治の本質をなす。われわれは、愛と信頼の政治を仁徳政治と言う」と述べ、「社会主義社会で真の仁徳政治を実現しようとするならば、人民に対する限りない愛情を持った政治指導者を押し立てなくてはならない。社会主義の政治指導者は能力もさることながら、何よりも人民を限りなく愛する崇高な徳性を備えなければならない。それは社会主義の政治が本質において仁徳政治であるという事情と関連する」ことを明らかにしている。

書記は次のように述べている。

「金日成主席は、人民にたいする愛をもっとも崇高な高さで体現した朝鮮人民の慈愛深い父であった。金日成主席は、早くから『以民为天』を座右の銘として、生涯を人民の中で過しながら人民とともに生死苦楽を共にし、人民のためにすべてを尽した。人民を限りなく愛する崇高な徳性をそなえた金日成主席を領袖に載いたことによって、わが国では真の人民の政治、仁徳政治の輝かしい歴史が開かれた。」(同上)

書記はさらに次のように述べている。

「わが党の仁徳政治は領袖、党、大衆の一心団結の源となっている。愛と忠誠にもとづく領袖、党、大衆の一心団結は、もっとも強固な団結であり、このような団結に根をおいている朝



鮮式社会主義は必勝不敗である。……

人民大衆が国家と社会の主人としての地位を守り、権利を行使し、主人としての責任と役割を果たして、主人としての価値ある幸福な生活を送るまさにここに、人民大衆中心の朝鮮式社会主義が人民大衆の絶対的な支持と信頼を得ている不敗の社会主義となる根拠がある。」(同上)

以上で考察したように金正日書記は、『社会主義は科学である』において、朝鮮式の人間本位の社会主義、人民大衆中心の社会主義は、人間と人民大衆にたいするもっとも正確な主体的観点と立場にもとづいて建設された社会主義であり、愛と信頼の仁徳政治を実現している真に科学的な社会主義であり、それゆえ必勝不敗の社会主義であることを輝かしく解明したのである。

朝鮮はチュチェ思想を具現して朝鮮式社会主義を樹立し、建設している。

世界のそれぞれの国の人民大衆は、普遍的真理であるチュチェ思想をそれぞれの国の特性と実情にあわせて実現し、それぞれの国式の社会主義を樹立し、建設しなければならないであろう。

## おわりに

人類はいまや、20世紀のおわりを迎え、21世紀にさしかかっている。

冷戦構造が崩壊し、自主的に生き発展しようとする人民大衆の志向は誰もが抑圧することができない段階を迎えた。わたしたちは今日の世界の現実をみて、悲観ではなく楽観をもつべきである。

今日の世界を楽観的にみることができる大きな理由の一つは、朝鮮民主主義人民共和国の存在である。わたしはこれまで17回ほど訪朝し、朝鮮での滞在日数も420日を超えている。わたしが金日成主席の指導する朝鮮とその指導思想であるチュチェ思想の素晴らしさを知ることができた第一歩は1979年3月から4月にかけての3週間の訪朝であったことは「はじめに」で述べたが、そのごわたしは朝鮮についての単行本を5冊、論文を多数執筆して朝鮮の真実を一人でも多くの人に知ってもらおうとした。

だが、日本のマスコミの報道の多くは、あまりにも真実とかけ離れているものが多い。

しかし真実はやがて日本人民のものになるだろう。そうならなければ世界の真の平和は到来しないからである。世界の平和と繁栄は全世界人民の心からの願望である。よりよい世界へ一步一步前進してきた歴史の踏みは、必ずよりよい社会を実現するであろう。